

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゅのおんなでし子はふくかつのひかるおと
主 女 弟 子 復 活 光 音

づれをてんしよりききうけて、
天 使 聞 受

げんそよりのていざいをふるいすて、しと徒
原 祖 定 罪 振 棄 使

にほこりていえり、しはほろぼさ
誇 曰 死 滅

れ、ハストカミはふくかつして、せかいに
神 復 活 世 界

おおいなるあわれみをたまえり。
大 憐 賜

【 中節祭日のトロパリ 第8調 】

きゅうせいしゅよ、まつりのちゅうせつにおいて、
救 世 主 祭 期 中 節 於

わがかわけるたましいにけいけんのみづをのま
我 渴 靈 敬 虔 水 飲

せたまえ、けだしなんぢはしゅうじんによべ
給 蓋 爾 衆 人 呼

り、かわくものはわれにきたりてのめ、
渴 者 我 來 飲

わがいのちのいづみたるハストカミよ、
我 生 命 泉 神 よ

こう え い は な ん ぢ に き す 。
光 榮 爾 ぢ に き 歸 す 。

【 サマリヤ婦のコンダク 第8調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。
光 榮 父 子 聖 神 歸 す 。

し ん を も っ て い に き た り し サ マ リ ア の お ん な 、 つ 恒
信 以 井 來 婦 恒

ね に う た わ る る も の は 、 な ん ぢ え い ち の み 水
歌 者 爾 睿 智 水

づ を み て 、 あ く ま で こ れ を の み て 、 う 上
見 飽 之 飲 て 上

え な る え い え ん の く に を つ ぎ た り 。
永 遠 國 嗣

【 中節祭日のコンダク 第4調 】

ば ん ゆ う の ぞ う せ い し ゅ お よ び し ゅ さ い 、 ハ ス ト カ 神
萬 有 造 成 主 及 主 宰 神

み よ 、 り っ ぽ う の ま つ り な か ば に し て 、 な ん 爾
律 法 節 筵 半 爾

ぢ は ま え に た て る た み に い え り 、 き た り 來
前 立 民 言 り 、 き 來

て、ふしのみづをく め、ゆえにわれら
不 死 水 汲 故 我 等

なんぢにふふくして、しんをもってよ
爾 俯 伏 信 以 呼

ぶ、なんぢのじれんをわれらにたまえ、なん
爾 慈 憐 我 等 賜 爾

ぢはわがいのちのいづみなればなり。
我 生 命 泉

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
しんぢよこせいなんぢよろこびなしょせいじんきとうよ
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖 なる
 じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 を 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖
 な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 を 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅
 せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 なる 常 生 者 我 等 を 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 栄 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 なる 常 生 者 我 等 を 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇
 き 、 せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等 を
 あ わ れ め よ 。
 聖 常 生 者 我 等 を 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ、

わが 神に 歌い 歌えよ、 わが 王に 歌い 歌えよ。

わが 神に 歌い 歌えよ、 わが 王に 歌い 歌えよ。

誦經) 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わが 神に 歌い 歌えよ、 わが 王に 歌い 歌えよ。

わが 神に 歌い 歌えよ、 わが 王に 歌い 歌えよ。

誦經) 我が神に歌い歌えよ、

わが 王に 歌い 歌えよ。

【 アポストロス 使徒經 28端 聖使徒行實 11章 19節~26節、29、30節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒行實の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) ステファンとき き きんちく よ さん もの ゆの時に起りし窘 逐に困りて散じたる者は、往きて、フィニキヤ、キプル、アンテ
 イオヒヤいたにまで至りしが、イウデヤ人じん ほかなんびとの外何人にも言ことばを傳つたえざりき。然れども彼等の中
 にキプルおよ及びキリネヤの人ひとあり、アンテオヒヤいに入りて、主イイススしゆを福ふくいん音して、エリ
 ン人じんに傳つたえたり。主の手しゆ彼等てかれらと偕ともに在り、多あ數の人たすう信ひとしんじて主しゆに歸きせり。此この事ことの聲聞きこえイ
 エルサリムあに在るきようかい教みみ會およの耳みみに及およびたれば、ヴァルナヴァつかわを遣つたして、アンテオヒヤいたに至ら
 しめたり。彼かれきた來りて、神かみの恩おん寵ちようを見みて喜よろこび、且かつしゆうじん衆人こころに、心かたを堅しゆくして、主したがに從
 うことをすす勧めたり。蓋けだしかれ彼は善人ぜんにんにして、聖神せいしんと信しんとに満みてられたる者ものなり。是ここに於て
あまた許多たみの民しゆは主つに就つけり。其そのち後ちヴァルナヴァはタルスゆに往ゆきて、サウルたづを尋たづね、之これにあい
 アンテオヒヤたづさに攜いたえ至いたれり。彼等かれら一いち年ねん間かん教きようかい會あつまに集あまたりて、許多たみの民おしを訓もんえたり。門
 徒とが「ハリスティアニン」としょう稱しょうせらるること、アンテオヒヤはじより始はじまれり。其そのとき時もん門徒とおの各
そのも其有ところてる所したがに隨おいて、イウデヤおに居けいている兄たすけ弟おくに扶さだ助ついでを餽これらんことを定さだめたり。遂ついでに之これを
おこな行およいて、ヴァルナヴァおよ及びサウルての手に託たくして、長ちようろうら老ら等よに寄よせたり。

(比較用 口語訳) ステパノのことで起った迫害のために散らされた人々は、ピニケ、クプロ、アンテ
 オケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語っていなかった。ところが、
 その中に数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行ってからギリシヤ人にも呼びかけ、主
 イエスを宣傳伝えていた。そして、主のみ手が彼らと共にあったため、信じて主に帰依するもの
 の数が多かった。このうわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会はバルナバをアンテ
 オケにつかわした。彼は、そこに着いて、神のめぐみを見てよろこび、主に対する信仰を揺るがな
 い心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました。彼は聖霊と信仰とに満ちた立派な人であっ
 たからである。こうして主に加わる人々が、大ぜいになった。そこでバルナバはサウロを捜しにタ
 ルソへ出かけて行き、彼を見つけたうえ、アンテオケに連れて帰った。ふたりは、まる一年、とも
 どもに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教えた。このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチ
 ャンと呼ばれるようになった。そこで弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄
 弟たちに援助を送ることに決めた。そして、それをバルナバとサウロとの手に託して、長老たちに
 送りどけた。

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) なんぢ へいあん
 爾に平安、

誦經) なんぢ しん
 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい} 神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾は義を愛し、不法を惡めり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書 12 端 4 章 5 節~42 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、イイス サマリヤの邑シハリと名づくる處に來れり、イアコフが其子

イオシフに與えたる地に近し。彼處にイアコフの井あり。イイス 旅に疲れて、井の傍に坐

せり。時約六時なり。サマリヤの婦、水を汲む爲に來れり。イイス之に謂う、我に飲

ましめよ。蓋其門徒は食を市わん爲に邑に往けり。サマリヤの婦彼に謂う、爾はイ

ウデヤ人たるに、如何にして我サマリヤの婦に飲むを求むるか。蓋イウデヤ人とサマリヤ

人とは相交際せざるなり。イイス之に答えて曰えり、若し爾は、神の賜、及び我

の飲ましめよと、爾に言う者の誰たるかを知らば、爾自ら彼に求めん、而して彼は

爾に活ける水を與えん。婦彼に謂う、主よ、爾に汲む器なく、井も亦深し、然ら

ば何より爾に活ける水あるか。爾豈我が祖イアコフより大なるか、彼は我等に此の

井を與え、己も、其諸子も、其家畜も、之より飲みたり。イイス答えて謂えり、凡そ此

の水を飲む者は、復渴かん、然れども我が與えんとする水を飲む者は、世々に渴かざら

ん、乃我が彼に與えんとする水は、其中に於て永遠の生命に湧く水の泉と爲らん。

婦彼に謂う、主よ、我に此の水を與えよ、我が渴かず、亦此に來りて汲まざらん爲な

り。イイス之に謂う、往きて、爾の夫を呼びて、此に來れ。婦對えて曰えり、我に夫

なし。イイス之に謂う、爾が夫なしと言ひしは是なり、蓋爾に五人の夫ありき、

しこう いま もの なんぢ おっと あら こ なんぢまこと い おんなかれ い しゅ われ
 而して今ある者は爾の夫に非ず、此れ爾眞を言えり。婦彼に謂う、主よ、我
 み なんぢ よげんしゃ わ せんぞ こ やま はい しか なんぢら はい ところ
 観るに爾は預言者なり。我が先祖は此の山に拜せり、然るに爾等は拜すべき處はイ
 エルサリムにあい と言う。イスス之に謂う、婦よ、我を信ぜよ、此の山にも非ず、イエ
 ルサリムにもあらずしてちち はい とき きた なんぢら はい ところ し われら はい
 所を知る、蓋救はイウデヤ人よりするなり。然れども時は来る、今は是なり、眞の
 れはいしや しん もつ まこと もつ はい けだしちち か ごと かれ はい もの もと かみ
 禮拜者は神を以て眞を以て拜せん、蓋父は是くの如く彼を拜する者を見む。神は
 しん かれ はい もの しん もつ まこと もつ はい おんなかれ い われし
 神なり、彼を拜する者は神を以て眞を以て拜すべし。婦彼に謂う、我知る、メッシ
 ヤ、すなわち きた かれきた とき ことごと われ つ これ い こ われ
 即ハリストスは來らん、彼來る時、悉く我に告げん。イスス之に謂う、是れ我、
 なんぢ かた もの たまたまそのもんときた かれ おんな かた あやし ひとり
 爾と語る者なり。適其門徒來りて、彼が婦と語れるを異みたれども、一も、
 なんぢ なに もと あるひ これ なに かた い もの とき おんなそのみづがめ のこ
 爾は何を求むるか、或は之と何を語るか、云いし者なし。時に婦其水甕を遺し
 まち ゆ ひとびと い きた わ およ おこな こと われ つ ひと み こ
 て、邑に往きて、人人に謂う、來りて、我が凡そ行ひし事を我に告げし人を觀よ、是れ
 ハリストスにあらずや。人人邑を出でて、彼に往けり。此の際門徒彼に請いて曰えり、夫子、
 くら しか かれ これ い われ くら かね なんぢら し もの ゆえもん
 食え。然れども彼は之に謂えり、我に食うべき糧あり、爾等が知らざる者なり。故に門
 とたがい い あにたれ かれ しょく おく かれら い わ かね われ つかわ
 徒互に言えり、豈孰か彼に食を饋りたる。イスス彼等に謂う、我が糧は我を遣し
 もの むね おこな そのわざ じょうじゅ あ なんぢら なおしかげつ かりいれ きた い
 し者の旨を行い、其功を成就するに在り。爾等は尚四月にして収穫は來らんと云
 うにあらずや、我爾等に語ぐ、爾等目を擧げて、田を觀よ、已に白くして穫るべし。穫る者
 あたい え み えいえん いのち つ ま もの か もの とも よろこ ため けだしかれ
 は値を得て、實を永遠の生命に積む、播く者も穫る者も共に喜ばん爲なり。蓋彼は
 ま これ か い ここ おい まこと われなんぢら つかわ なんぢら ろう ところ
 播き此は穫ると云えるは、斯に於て眞なり。我爾等を遣して、爾等が勞せざりし所
 か たにん ろう なんぢら そのろう い かれ まち おお じん おんな
 を穫らしむ、他人は勞し、爾等は其勞に入れり。彼の邑の多くのサマリア人は婦が、
 かれ わ およ おこな こと われ つ しょう ことば よ かれ しん ゆえ
 彼は我が凡そ行いし事を我に告げたりと、證せし言に因りて彼を信ぜり。故にサマ
 じん かね つ とき とも とどま こ かね かしこ とどま ふつか なお
 リヤ人は彼に就きし時、偕に留らんことを請えり、彼は彼處に留りしこと二日なり。尚
 おお もの かね ことば よ しん しこう おんな い われら すで なんぢ ことば よ
 多くの者は彼の言に因りて信ぜり。而して婦に謂えり、我等は已に爾の言に因り
 しん あら けだしみづか き かね まこと よ きゅうしゅ し
 て信ずるに非ず、蓋自ら聞きて、彼は誠に世の救主ハリストスなりと知れり。

(比較用 口語訳) イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが、そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時は昼の十二時ごろであった。ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」と言われた。弟子たちは食物を買いに町に行っていたのである。すると、サマリヤの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。イエスは答えて言われた、「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。女はイエスに言った、「主よ、あなたは、くむ物をお持ちにならず、その上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れるのですか。あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」。イエスは女に答えて言われた、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。女はイエスに言った、「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」。イエスは女に言われた、「あなたの夫を呼びに行つて、ここに連れてきなさい」。女は答えて言った、「わたしには夫はありません」。イエスは女に言われた、「夫がないと言ったのは、もっともだ。あなたには五人の夫があったが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」。女はイエスに言った、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます。わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。女はイエスに言った、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」。イエスは女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。そのとき、弟子たちが帰つて来て、イエスがひとりの女と話しておられるのを見て不思議に思ったが、しかし、「何を求めておられますか」とも、「何を彼女と話しておられるのですか」とも、尋ねる者はひとりもなかった。この女は水がめをそのままそこに置いて町に行き、人々に言った、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんください。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。人々は町を出て、ぞくぞくとイエスのところへ行つた。その間に弟子たちはイエスに、「先生、召しあがってください」とすすめた。ところが、イエスは言われた、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。そこで、弟子たちが互に言った、「だれかが、何か食べるものを持ってきてさしあげたのであろうか」。イエスは彼らに言われた、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。そこで、『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる。わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかつたものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」。さて、この町からきた多くのサマリヤ人は、「この人は、わたしのしたことを何もかも言いあてた」とあかしした女の言葉によって、イエスを信じ

た。そこで、サマリア人たちはイエスのもとにきて、自分たちのところに滞在していただきたいと願ったので、イエスはそこにふつか滞在された。そしてなお多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ へ